

朝夷巡島記第八編二



42  
~ 13  
704  
37



遠門  
號 706  
卷 37



明治三六年  
十月九日  
購求

朝夷巡島記全傳第八編卷之二

東都

松亭金水編次

續輯第十三

- 一頭の野豬確執と醸を
- 二歳の小御隠川小漂ふ

當下義邦の吐息吻を。そのころのハナ。心著ぬふあるが。小四郎のこの所。  
 救代相続く威勢へ自然吾小勝なり。吾魚行の権威を。渠小致する  
 心ありねと。版ふ初と。以挂ら。は。ま。も。和せ。る。ふ。不可。多。え。ん。と。ら。ひ  
 う。と。然。る。女。と。條。と。と。辞。ま。渠。等。小。笑。ひ。且。ん。と。と。り。心。あ。の。あ。り。の。う。兼。諸  
 一。と。あ。時。日。と。と。定。め。し。ま。い。あ。ん。が。う。釋。狸。あ。り。と。今。更。小。致。改。ま。と。と。う。真  
 罰。を。被。ふ。と。適。得。る。控。子。の。た。た。ま。を。枯。る。と。も。天。命。あ。る。は。非。の。た。ま。  
 々。と。生。類。と。害。と。佛。の。滅。め。あ。り。と。の。下。も。禽。獸。蕃。息。す。則。人。倫。小。害。す。

月夜入編卷之三

因に田獵とありし武士の道なり。取手人の教へり。法て辞むを所為す。あらず  
と回答のへに。筐篋の面をて。心裡の善を。ぬぐふ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
かく其日。もどつ。ふれ。と。宮小四郎弘義の。董次秋弘の。飾り。いと美く。あ  
はれ。奥忍二戸。えの。若狗。あはれ。の。厚。總。み。金。覆。輪。の。教。む。と。尾。髪。能。く。を。磨。き  
て。あ。と。晴。き。と。牽。せる。吉。見。の。行。者。の。入。部。の。三。在。柄。平。太。胤。長。より。借。り。け  
し。馬。あ。て。劣。る。べ。う。い。ん。と。ふ。う。ら。り。初。て。その。日。お。至。り。け。し。曉。七。ツ。小。勢。持。し。ん。を。も。あ。初  
林。と。禰。小。免。狸。の。類。ひ。の。こ。の。邊。山。深。く。わ。べ。こ。の。こ。の。獲。物。の。あ。ら。び。と。や  
日。由。ふ。あ。り。け。し。と。傍。の。芝。生。小。幕。うち。廻。して。准。備。せ。り。割。落。と。せ。し。或。は。竹。筒  
の。酒。と。酌。と。替。く。息。と。休。め。る。農。民。の。吹。さ。る。竹。螺。の。音。を。き。み。て。い。と  
勇。ま。かり。り。と。董。次。秋。弘。の。坐。お。り。ま。ず。今。大。く。狩。り。ぬ。え。ん。在。下。ま  
先。陳。不。進。と。手。柄。と。う。い。え。ん。と。我。ま。の。う。り。踊。り。出。か。の。馬。お。跨。り。暮。地。お

池。出。り。行。者。へ。ん。未。望。と。い。ふ。あ。ら。ぬ。狩。り。の。心。進。ま。ず。ま。も。あ。ら。ぬ。あ。け。け。馬  
飼。標。吉。郎。の。青。春。と。い。ひ。折。ら。秋。弘。が。傍。若。无。人。の。挙。動。と。う。心。下。快。く。去。る。い  
如何。す。と。類。ひ。る。獲。物。と。得。て。秋。弘。の。鼻。を。挫。き。え。ん。の。と。休。め。も。必。し。結。ぶ  
と。然。る。ま。ぎ。獸。も。出。ね。ば。い。ま。あ。く。あ。ひ。て。あ。り。ら。ず。今。秋。弘。が。池。と。い。ふ。と。去。来。と  
君。不。由。の。統。と。池。出。り。かん。や。と。い。ひ。り。不。行。者。へ。荒。ぶ。ら。ち。笑。ひ。被。ん。と。あ。り。の。波  
ま。づ。け。り。吾。の。跡。より。出。ん。と。い。ふ。あ。ら。ぬ。と。い。ひ。先。仕。ら。ん。也。免。ま。し。と。い。ひ。放。し。の。休。め  
小。幸。を。あ。ら。ぬ。は。ま。ら。ぬ。と。い。ふ。と。諸。拍。あ。ら。ぬ。池。甚。ん。と。あ。せ。ま。し。と。い。ひ。標。吉。が。笑。む。と。い。ふ。の。か  
借。馬。を。あ。の。逸。物。と。獲。て。へ。虎。と。や。の。と。く。あ。敢。て。近。する。と。い。ふ。不。協。い。ふ。は。ら。と  
十。町。の。秋。弘。が。笑。む。と。い。ふ。あ。ら。ぬ。か。ら。所。小。擲。の。と。い。ふ。野。猪。二。頭。踏。ま。り。眼。を  
ら。し。牙。を。齧。と。標。吉。と。馬。人。と。も。免。ん。と。い。ふ。と。來。り。け。り。標。吉。の。い。ふ。と。い。ふ。の。希。代。の  
僻。物。と。い。ふ。と。獲。物。の。と。い。ふ。勿。心。地。と。い。ふ。と。不。失。と。い。ふ。と。ち。番。ひ。後。矢。と。射。ま。し。追。す。

猪の太腹へまけまどろ得小徳と歎きまどろ一矢と受て残さず怒り狂ひ  
 まどろ飛来と標吉透さび可矢と番ひ胸と目かけ射けまどろ遠面の観者  
 一差ひと矢の狙わらざりけまどろ急所あるまどろあまどろ野猪  
 の勢ひ推けまどろ標吉の敵とせむ一散れ走り去る逃しせと標吉の報と  
 あてのりまどろまどろ例の驚馬と足挫の後く樹まどろ分きてまどろ  
 るまどろ標吉益焦燥と鞭弛と合せ混走りまどろ奔らせまどろ毛よりされた秋弘の群  
 が列卒の方小徳と好まどろ軟やまどろ同む向小波如の溪間より情の正作猪  
 二頭躍り出てまどろその蹄小挂らんとまどろあまどろ傍らまどろの同者小  
 へまどろ猪の彼方走りまどろまどろ波行方まどろまどろ秋弘はまどろ今まどろ疾かまどろ  
 猪と遁るまどろせと残念ありまどろ吐きまどろ此方へ来るまどろひまどろぬ敷蔭まどろ  
 ひまどろ二頭の猪白鼻嵐と吹まどろ秋弘自らて跳挂る秋弘まどろまどろまどろ

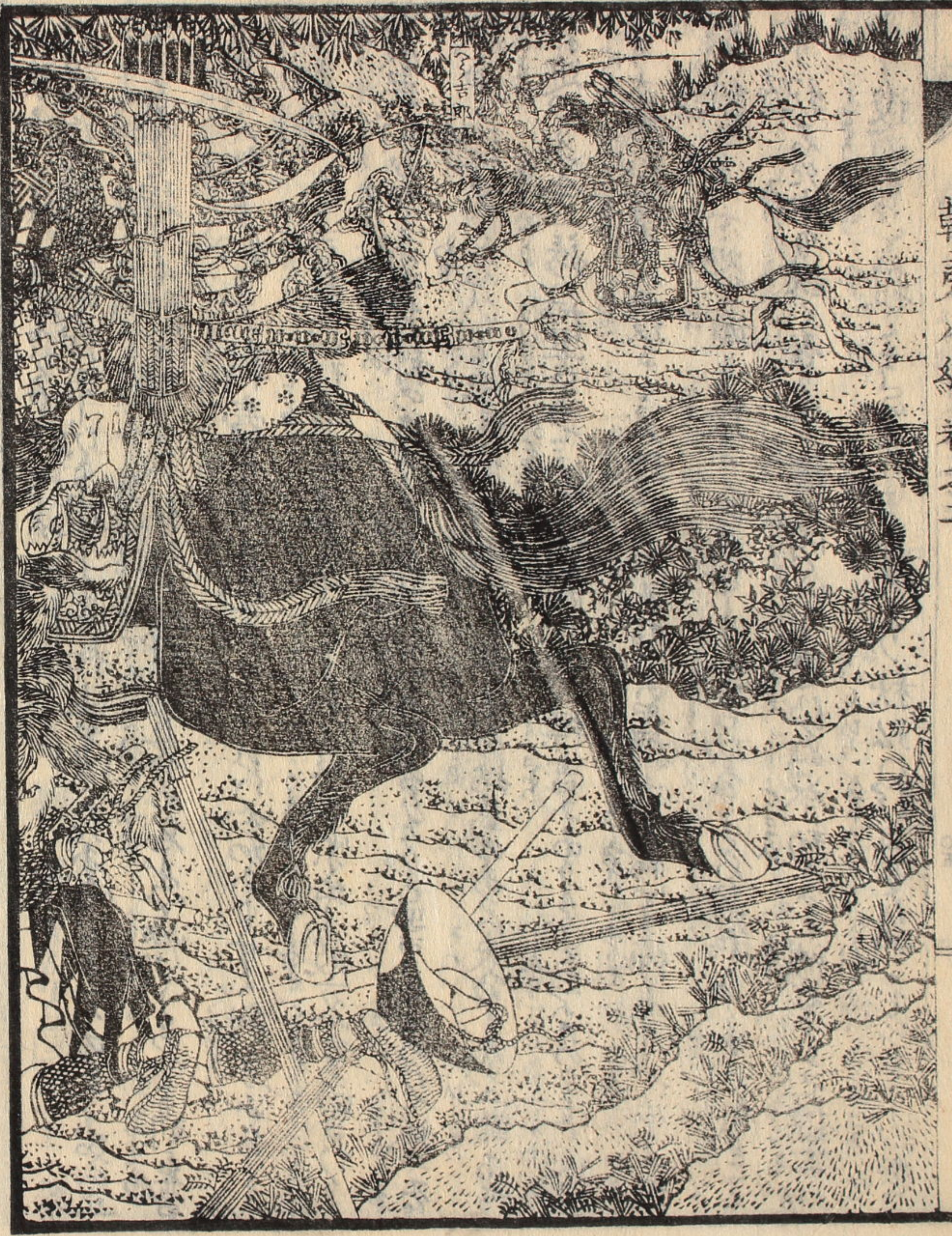
馬小矢番小眼もあ腰不佩と陳大刀と引ぬまどろ馬上より猪の頭と  
 けるまどろ小の似は太く弱りてまどろ作の足と礮とある秋弘大刀軟びまどろ  
 筋力の勝まどろまどろ小件の極歎を一ちまどろ平張りまどろ心地好し恨むまどろ  
 ありまどろの働まどろまどろまどろ一人心不誇りまどろまどろ一打らまどろまどろ遠面へ  
 倒まどろ以まどろまどろの猪の向小標吉小射まどろまどろ矢二筋受まどろまどろ  
 通し初矢弓勢強く羽服責てまどろまどろけまどろ始ありまどろあまどろ心神次第  
 勞と果人と看るまどろその性まどろ一旦威勢と揮ひまどろ頻て小昏眼せ  
 折る陳大刀と太くおまどろ快まどろ此知小例まどろまどろ秋弘の太板小矢のあまどろ  
 心の著び大音揚て秋弘と毛緒と刺面まどろまどろ未まどろあまどろ叫びまどろ列卒小  
 農民们まどろまどろまどろまどろまどろ向小溪間を跳り出まどろまどろの鼓  
 ひまどろ加る希代の太猪と怒り刺面ありまどろまどろ同所為まどろまどろはまどろと松隈

秋弘いよく誇り馬上で扇と柄とうち披ききひあき老共よき息  
 絶ぬとぞ今頼準備の索り縛し本陳昇ゆけと指揮小列卒腰不  
 索とぞ今四所と減げ昇りてはんを馬飼標吉郎嗣忠か  
 馬小鞭打て野猪の仕方と索し此処其処り刺す馬飼ら  
 体が董次秋弘いよく誇り馬飼刀松秋弘を今日第の獲物と  
 けとて今もよこの猪の去ぬ年故右幕府富士の巻狩とひに田  
 四郎忠常が刺苗とて彼あふ夫小勝る猪をすやう文も用を陳分  
 りとて一赤小撃殺さるに己が腕力の勝る小あす実山神の賜あ  
 猪の年と経るに心不松の脂と塗り沙石の上と積ひてその毛と固  
 皮故不矢のまてと彼とて彼とて彼とて彼とて彼とて彼とて  
 とりやあふんと危すを小とせ太刀のてとと利苗がつ小も人の

見けたり小  
 胸の毛刺不似たり。まて是牙の大やう。息絶て後さるるも。猪人  
 怖しと震ひ戦慄さるる。と自標の心言下小人のとぞらぬぞ不  
 と標言の心で編。つくと傍あふれと小信さる猪ありとぞらぬぞ不  
 ぬ是下が獲物とらえ不。実の吾獲物あり。いま如何不と狼狽し列  
 卒も眼を挿つけん。吾獲物とら證明の太腹不矢一筋。まては  
 今一矢耳の傍と母貝さかむ廻りて夫の何方へ落るる。太  
 太腹の矢の深入りて。僅小矢羽のつらあ。引抜て一使あま白  
 吾姓名と録しつらん。秋弘心づいたる。太腹の下の方より  
 胸へけて夫一筋射込。漸く五六寸羽の如くありけり。ひさし  
 然あふれ体も列卒小命。夫と抜さるせとぞらぬぞ不標士口が  
 嗣忠進え在下。獲物とら異備あは。とぞせも敢て董次秋弘

うち笑ひ不測のこゝろのさる夫鹿禽走獸の山野とて家とほ脚あまの何方  
 ともなく走らるる彼が性之任を足下との始め矢と射たりともそ如く驚まを脱に  
 遁と走りこゝる吾に限らず餘の人の後をこゝと利角とせんお始めの矢と利角と  
 志すを獲物との所謂の一旦矢とを射りていかに間中あつて逆結てその所を  
 利角とる條もあつた流語といふんやう故來をせんとも劣らぬ獲物とる鳥の  
 老もあつたりと嘲り笑ひて人のせむを老若獲物と鼻をさ後より疾く来と  
 馬の鼻と引向の標吉件の悪と笑ふは流語を秋弘馬のあつたり廻りいふの飛  
 禽走獸の所も定めず絶絶といひ和主不實とて吾よくかきりおまをゆの熱  
 不利な事をもつて扶むをろふ朋と射撃とそお流波が騰騰不遠うさるに於て  
 自らまぬがやとふお驚まんやその所へ和主が舍を一刀おち伏せりと誇りう  
 いふとも侯痛さる條もあつた流語といふ棄ある雅。肩をねと陸奥をい經

任退治の陳在で粗軍功の現一と和主等とてお朝らとてそのまふお止  
 へこと巻と握りと眼と睜と秋弘の心裡に五分の怒と懐とらとて列を  
 が思はん所も心も鞍壺不佛とてそのまふ止はぬお何れ甘と對ふおあ  
 と身構と吉見の行者のわらとあつともあつに馬業出。彼方此方と廻りわ  
 農民們がはる小定刀称のあまもあつた勝越と獲物とらと雲言ふお流波つて流る  
 誠ある祝さんと心も遠うさる彼方の樹間お馬のあつた夫とんと一鞭あ  
 池近づ今一務の標吉とてその所用と理の標吉おありたりととらりの吾徒と  
 あり大事の小事に設とる人理と忘とるお標吉よ何とぞ許たりや汝が一矢  
 射。獸とともを怨と遁と後お人の得とんと吾功ありとの鳥游るおずや。かよこと  
 あり祝志死中の味とるおもく瑞と用いと意はぬお奉勅とるお滅めとて標吉の  
 少一透巡てはと相とるおもくあつたり。秋弘の屈せは吶とらとてお射老の



董次秋弘  
荒猪を  
刺留す  
一刀小

あき弘

荒示とうち笑て標吉が无礼せし在下小免せし有怒あり大さるらん実  
 小和殿が初如、先未赤禽走歎く誰か主らん未獲らん今主らん  
 今日の大獵へりし小和殿小あころ去来と父多弘義不ゆと告て歎く  
 中ゆと奇る獲物とあきと随分心と用ひると固計の老小入らず救代  
 爰不小住居せ和殿小柄あせの歎ゆんあり氣ありとら大ひつ此方来  
 標吉(吉)見の冠者、標便の計らひと歎くとまてあねと渠聊の威小暮せ  
 人ともあひれ、奉勅渠を僭上无務るま今治めて入部の時、その鼻と挫す  
 後必大害と曳出えぬの心中更不穩るねと今ね何とも詮方あり計らふ時  
 弟ゆあふと胸と推て義邦、後小恙せ此方到る小義邦左右と顧て標吉  
 と近く振さ汝計らひと寛宥小せよと心の怒りま鮮やぬ、面色小赤  
 小まど先よく是とせつ小底意何とま、小後八千代と祝いその為る初以

必てこの符と企てつるふと一頭の歎の故不降ひと仕出さんと思慮あり然れ  
 秋弘日未より五ととせまて意あり、粗とととと汝ゆまそのふと快  
 渠等へら不代任人人民も大に懐く吾との地改るるといふ昨日今日あて  
 その土地の肥瘠、廣陲地理といふも曾て知るふ人と物と頼抵つ世に縁  
 支護必れ既小むじ太宰経任を小下向せらるると仲妹望の夜ありた  
 今宵の月と賞さんと獨居の庭小、旅鞍の庭小喬木あり月と妨く、縁後  
 の人として彼も木と伐らる。終夜琵琶と彈ひ世の人凡流と移れ、後世を  
 解つていそ、まろ府小介つる土地の肥瘠且人民の難易と初ひ必て政と定むを  
 誰か信ら小至らすと、香向木と伐る、佳興と催る、人としてま家と活め、  
 誰か家と活め、とととと確痛と入らと故小今日の符余の、先未う心小



あねと渠等より言えは牛紐く既ならず及ぶるも。其のふりて要とすべし。  
 説示さす標吉のりも射者思慮深きと不感ふ感ふ心も解け。逸と畏と  
 ひひぬとを稟め徐とを陳め暮のらち引返えとす。宮小四郎  
 義へ鞭とあや池来り。只今刻卒がまきす。是下の乾の方あり。林原の裡  
 おまを多くの鹿とてい故不彼処と稱せり。喘注進せり。いさせのふれ  
 袂共不弛んと計るれ不似とす。粉重次は良の文とて池さう。射者の乾の  
 方不走せ在下と馬飼姓と。北の方射ひて池せ敷と中不逐取終て慶来  
 廿六いと興あらん吉見刀拵あ土地の安内。まうくめる。それ者共往  
 ひと荒川縁と獵えよ。らひ狩て術と走る。射者へこと言ふ不心あ。味小日申  
 下刻今より茨子の時刻もあぬ。天色暴不朦朧。うて風烈あ。吹来ぬ。小  
 雨あ。降んと序あ。りり。と各放処へ弛ゆ。小吾のこ此処不往まらば。

比喩ありと嘲らえん。まら被処まを性なり念ぬ。とて処る雜人は個とま  
 まて池出れ。と不奇と活説あり。是より向吉人の射者謙念不故あり。荏柄  
 彼不執居のり。何方もあ。二歳さうの向と約来り。折節射者の庭小出  
 ま。衣の裾小別黄縁て。と。乳あ。えけ。射者へと。と。具春不食と  
 久名と並松と野めひ。約元来陽敷。老よ。人の恩と。日本地鳥取郡萬の  
 狗より。世の玉中あ。え。の。鮮と。と。文石の小丸の。白狗か。妖と  
 あり。然れども。運の尋常の狗あり。手幻術と。と。射者へ。と。の狗小  
 老のあり。と。日未。と。並松と。と。初の出。射者へ。と。  
 新と。と。同く。と。下部。と。と。伴ひ。と。その  
 道。と。他の狗。と。と。並松と。と。小。と。更。と。と。  
 ろ。依然と。と。人向。と。と。適他の狗。と。と。牙。と。と。威。と。と。群大

さう不修つたぬを尉老の馬上小こまをりて... 狗希代の逸物ありき... 方よりう  
来りけむいよぬのて湯不けりとい心程不飲びて猶侍ちりく... 重うう。この日ひまこ並  
松の尉老不従ひておみり。形を雲下並松の尉老も此なる馬不副て後まのせりま  
来りて尉老の折と顧とを並松よほさる。ま声けりあがら道助不溝川あ  
りて隠川と唱らるう。その幅あを三丈をう。山川あまの瀬の浅くまを漲る水い  
瀧不似る。彼安内不来り者皆の川下少の屋をせびその川不うりて絶る  
歩の涉るもを尉老の馬と颯とち入ま向ひの岸著てうる不並松の涉り終て  
彼方此方と汚湛りまの彼方著てうて水と身と抱入ま四足と足掻てその  
川の半をり来り。ううより浪不お流さま様さう... けい... 行者の  
除て馬牽向け並松おくと呼へ此方よりくまと... 水勢の烈く... 元来不  
狗の力もほむ川下の方推流さる。新人們は是とてをを慚や狗が流るを支扶

けよと夢と揚四五個二面下立ぬまをその間不並松いま七八回推流さる  
ま今の大不遠ざう。逐著人と雜とをまて空をく岸不上る。こ小松  
吉見の尉老の馬上を伸より遙する不並松の浮ぬ沈ぬの漂ひて岸を  
不生る不隠まをその勢さるを義邦不嘆息しんを牛馬  
六畜の水不介を溺るまを天性水焔と得るまをま心安く思ひ水  
勢殊不烈くもか迷不推流まを此方とて人失る。這の小狗の故ある。  
渠の尋常の狗と遠ひ人俗とをよく徳らひて吾情と離まぬ。此の形不副  
ど。然ると今をりうのいさ川あて失るる遺憶とありりす。や這不流これ  
つるも溺と死すともあまを不来をの性方と索ねてうむ。と安内せし新會  
と近づくと汝等不の彼知の宮氏父子まを標吉も在けり。此のようし若  
並松が性方とんを吾の川下の方へねねを安否と知る速不来るべし。

さまに在下と候とあり心任せ不存せしきよとに候と傳へてしひの池に候人手難  
 人登り畏と候値そのまに二箇所ありてまじしゆん幾つか相公傳副て何方まをり  
 山供せんとい得地頭とまをり分分まを三日後に著て近來る府有の川の川橋  
 と候と候ふ十町餘也然るふ川の副の棘口の穀りやうと生茂りて路もあ  
 らず馬の足とまをりてまをりて馬もあも右手廻るむじ洪水をさる道押堀  
 とありしといひ大なる池とあり故ふりて右手不避てまをりて穀十町とあり  
 彼川との間途不隔と候とまをりて樹木茂り薄高草路と候とまをりて  
 ありけまをりて忽心地とまをりて後方とまをりて雜人們馬とありて得續と候と  
 遠方とまをりての義邦心ふもあま並松が先途とまをりて安内とありて  
 來つてまをりての思と候と候へ何のの所へまをりての岡轉と候と候かん馬杖柱  
 めに樹林の裡と候と候ふいとまをりて曇りて天の夕陽沉とありてまをりて更ふその善悪と

ありて困果とありて折りて旋回暴風來と雨と候と東松と突かぬ  
 不降とありて冠者天と作とまをりて這の怪とありてぬ虎とありて今日の日和の受  
 束とありて思ひとまをりて彩とありて荒んとありて思ひとありて傳も候とありて咳  
 ろとありて傳も松の木と候とありて傍とありて咳とありて風烈とありて渾身とありて  
 水漬とありて不とありて冷方とありて折りて件とありて雜人とありてお池とありて冠者馬の傍と  
 うら傍り思ひとありてかけぬとありて雨風辛とありて目とありてめとありてめとありて傍とありて  
 あつふふ止らせとありて逆の流とありて所とありて池飯とありてとありて大雨とありて隠川の水  
 高増とありて帰とありて路とありてとありて件とありて川の流とありて水とありて聚とありて常とありて  
 深とありてねとありて大とありて雨とありて遭とありてとありて馬の脊とありてとありて後とありてとありて  
 憐とありてもとありて心とありて一人とありて心とありて細とありて存在とありてとありて冠者とありて  
 元來とありて悟とありてとありて更ふ真愛とありてとありてねとありて汝とありて吾とありて従とありてとありて

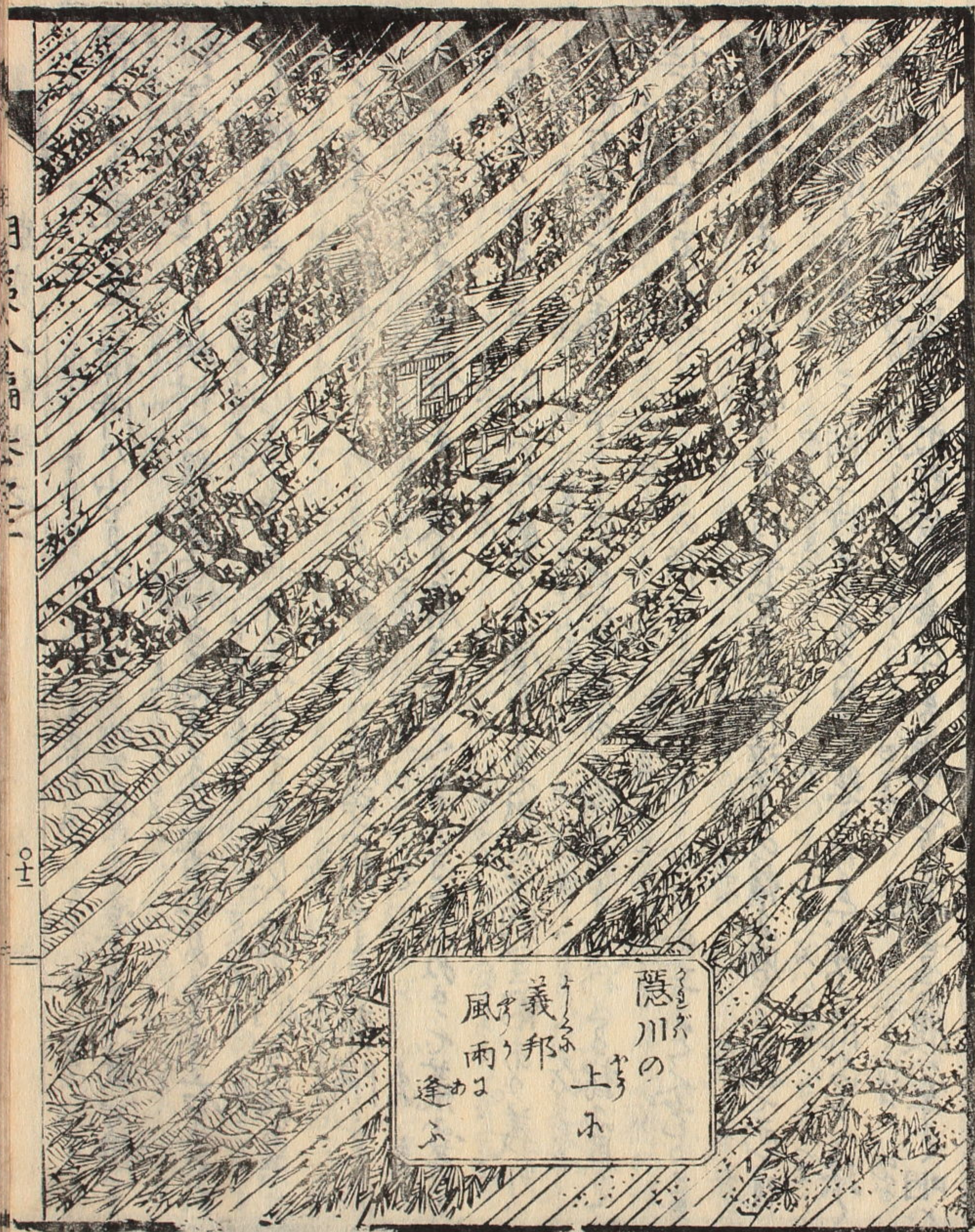
こと借隠川水増て渡り給ふ幸あり。何もの方小路ある。夫等の偏小汝  
 らが郷道するの歩の懐小は先か川小のさるる人馬の鼻と引向け。飯ら  
 とする雨風のまじりく烈き吹来り面と向く。さるるのあはれ傍る大木の根に  
 小轉二條の路の彼方小横り。此のさるるの先か人か。さるるの二足も進  
 得む右左す。回小日の暮七十歩の外も。さるるのさるるの義邦也。  
 心裡穩ま。今より彼処へ歸り。さるるの暮果て。夜も別下。その夜も知  
 らぬ荒川と安小渡ら。還あへん。さるるの武士のさるるの窮迫のさるるの野小  
 伏し。山を寝さ。さるるのさるるのさるるのさるるの雨風。凌ぐ。さるるの新と安さるる  
 明も。飯らんのこと。雜人等も。おれと。さるるの果等。いさ。使る。さるるのさるるの  
 今さるる。輒く。飯らん。さるるのさるるのさるるのさるるの相公の。さるるの宜。さるるの  
 方小。さるるの右。左。初。さるるの二。叢。曹。後。ひ。樹。落。あり。さるるの雨の。漏。ら。ぬ。さるるの

ぶ。便。より。と。此。樹。の。下。さるるの傍。て。雨。時。疲。と。と。休。め。の。大。雨。を。主。僕。が。衣  
 類。を。さるるの濡。さるるのさるるのさるるのさるるの乾。さるるの手。段。と。さるるの樹。の。下。さるるの枯。枝。朽。葉。の。さるる  
 濡。ぬ。と。拾。ひ。さるるの。燧。杖。と。把。出。し。漸。く。火。と。移。さるるの。も。濕。り。傍。る。雨。中。の。枯。枝  
 燃。え。さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるの

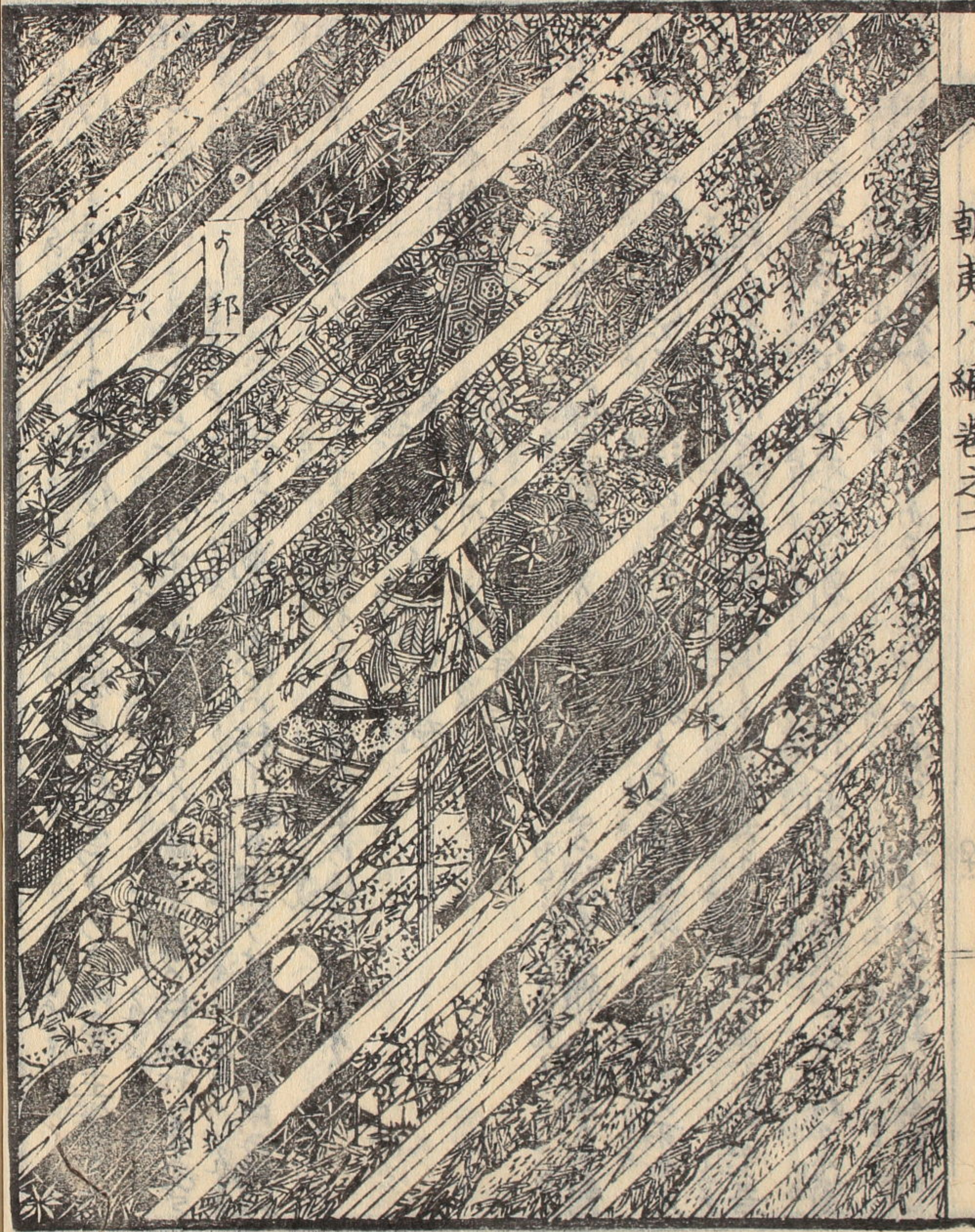
續輯第十四

幻術と現山神の祠  
 危難と救ふ夢と昇法師

當下義邦傍と。さるるの僅十段。さるるのさるるのさるるの舊。さるるの祠。あり。雜人。們。さるるの對  
 ひ。と。彼。知。小。何。の。神。と。祀。さるるの祠。の。あり。と。汝。等。知。さるるの雨。と。交。さるるの屈。竟。の。不。あ。ん  
 と。い。ひ。け。と。の。雜。人。等。の。作。さるるのさるるのさるるの這。怪。さるるのさるるのさるるの涉。小。祠。あり。と。更。小。知。さるるの吾  
 們。の。教。育。の。年。の。涉。と。い。は。未。だ。と。新。と。伐。り。耕。と。刈。り。案。内。大。と。さるるのさるるのさるるの  
 計。の。祠。あり。と。争。う。さるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるるの



隠川の  
 上  
 義邦  
 風雨  
 逢ふ



義邦

常言ふも鹿と逐ふ獵師の山とて平なり。汝も常ふ遠く来て薪と推して  
 秣の所も陸とて樹林の裡に坐せ微なる祠ありふ心著ぬのあり。右に  
 ままと彼処へもその雨風と凌ぐと義邦馬と歩ませり。雜人們の後の著  
 性なりふこの祠兼奉りて軒端の雨露ふ朽とて部隔子の廟  
 ままと葛不桂ふ八重葎の生茂り扉さへくたりとて人々ぬまて。荒れ荒れ  
 祠あり。さうけとて取つて拜殿のうと廣らうとて敷人と納むとあり。義邦の  
 右祝左祝やと馬より下りて馬の所処あり。樹木繁茂を枯る様不尻もち  
 挂て社壇の方と熟するふ室の夜もまの善悪の分とて安ふとて中  
 尚朽損とてあへんぬの憶る。怪我やせん。你達もその傍に腰もち挂て雨と  
 とと黙然とてお在ると猶二時ふありぬ。然りけとて吹く風はよく  
 雨と烈火に加旃昼餉とて彼刻終り食ひも湯水とて喫せ。腹空しく咽ひ

乾けと撥と面と點滴より。他は欣べさりのものあり。今にわく。其果て雜人們の  
 始り。ことあり。今に物とあり。寂寥とて雨風の多の。烈しく吹き。か  
 折る。社壇の方。物の音く。まると。冠者の方向とて。祝ふ。頭の糸を  
 狨猴のや。首ふ。黄金の璣。珞つら。唐冠も。さう。被り。ゆ。一條の袂  
 提と持。その衣服。唐め。と。容別。が。何。方。より。伏。か。ま。来。て。  
 上坐。お。ある。不。と。続。と。て。来。る。の。能。の。改。め。人。才。あり。あり。ま。虎。の  
 頭。豹。の。頭。或。ひ。松。の。頭。あり。と。各。衣服。の。世。間。ふ。人。別。ま。さ。る。の。と。者。  
 狨猴。の。左。右。お。坐。と。下。ま。す。その。徒。者。も。と。首。个。さ。う。面。相。異。形。の。虫。益。者。  
 哉。千。と。り。く。下。坐。お。居。り。て。更。お。教。へ。体。と。あ。す。元。来。社。壇。お。燈。火。あり。思。入。も  
 人。々。の。勝。る。れ。と。渠。渠。の。形。の。是。と。月。中。お。ま。さ。り。く。ふ。人。の。義。邦。心。お。好。り  
 て。ん。と。深。山。幽。谷。の。程。の。変化。あり。と。余。害。と。あ。す。と。ま。と。の。然。を。お

山深き。樹多き。郊野の。然るも。國有くも。安ぬ。歎の。あ。も。
初。こ。ま。あ。ず。狐。狸。の。属。ひ。が。吾。と。狂。く。才。の。駁。不。せん。と。る。人。憎。
さ。憎。も。あ。れ。勅。と。退。治。せん。と。不。虞。の。過。あ。ら。他。の。喧。ひ。の。推。
あ。ん。ん。怪。と。人。怪。ま。ご。ま。い。妖。怪。消。る。と。あ。ろ。た。下。で。死。せ。復。り。て。あ。
為。神。と。ん。あ。れ。を。も。出。さ。ん。窺。ひ。と。雜。人。們。の。あ。れ。不。回。顧。て。太。孩。
さ。脱。不。坐。と。離。ま。て。戰。慄。作。て。冠。者。の。看。や。り。を。低。め。強。く。こ。う。狐。狸。
の。こ。も。と。威。と。あ。り。と。釋。め。て。ま。と。人。上。と。判。え。ま。も。う。ち。成。る。不。統。領。さ。
極。猴。の。い。と。吾。と。天。帝。の。命。と。稟。て。吉。見。の。冠。者。義。邦。が。命。首。才。と。奪。へ。ん。と。
こ。と。窺。ふ。と。ね。月。の。ま。と。集。ま。と。名。家。の。族。あ。ま。と。輒。く。近。付。て。懐。い。ま。今日。
ま。の。終。止。し。る。今。宵。の。脱。不。と。の。こ。と。果。た。ま。と。第。一。の。渠。單。見。あ。れ。風。
雨。不。迷。ひ。進。退。を。ま。り。に。此。処。不。居。ま。り。さ。の。ゆ。え。退。ま。と。ま。ず。ま。未。各。准。後。あ。れ。

渠若年不あり。み。く。刃。汰。と。熟。煉。ぬ。ま。並。の。敵。不。あ。る。は。と。人。と。も。り。を。
狐。の。頭。あ。る。者。勝。と。進。め。大。王。の。ま。と。必。ま。の。ひ。と。渠。何。か。の。術。あ。り。ま。運。
命。脱。不。編。ま。り。と。の。た。ん。と。累。る。卵。の。ご。と。ふ。ひ。が。一。撃。と。命。と。ひ。つ。下。吾。
矢。王。の。あ。り。ま。す。神。通。自。在。あ。る。と。人。不。三。十。年。の。世。と。終。ま。と。世。の。こ。と。あ。ま。
ま。の。ま。と。あ。り。ま。す。假。令。渠。の。所。の。危。と。道。と。り。と。ま。遠。く。ま。り。と。人。の。
為。不。害。不。遇。と。と。必。と。と。終。り。と。不。述。の。ひ。は。え。虎。豹。の。頭。あ。る。の。も。示。あ。り。と。
点。次。の。頼。て。後。方。より。把。お。い。その。丈。五。尺。を。り。あ。て。蜀。の。関。羽。が。持。と。る。全。背。
龍。刀。の。か。く。ま。り。と。あ。る。の。大。刀。と。及。の。幅。七。八。寸。明。晃。と。輝。と。う。と。と。抜。出。
と。右。手。不。引。提。げ。鉄。将。の。か。准。後。せ。得。物。と。出。ま。と。と。あ。ら。ら。と。怒。の。既。已。
と。老。の。把。お。ま。り。八。尺。を。り。の。蛇。棒。の。鐵。と。拵。と。尖。と。一。指。と。透。る。の。あ。く。ま。と。あ。
と。打。ま。り。か。の。小。兒。の。就。ま。不。精。と。り。と。蠅。と。と。と。鼻。へ。向。あ。る。の。蠅。と。滅。る。と。鼻。佛。

う。これにて回撃するも如くあつてんといふも味も消て生  
 ず心地もあつてなまを雅人們の戦慄なま神氷の下も寒も。行者の渠も物  
 語とまその体と熟くえんとのあつてなまも。狐狸の所為あつてん若とよ  
 一万小這奴も首と砍並んといふものも運命縮まる。倘と道もも程も人  
 の害も遇んといふも流も虫血者の言もあつての強心も挂てとあつてね  
 実も渠もあつて神通とびと不測のよあつてあつて。奇もとつてあつての心  
 御怒感と懐も。標もあつて折もとあつて。雷光の輝もとつて眼  
 行もあつてわの義邦も嗟とあつて。後もあつて。たつて。當下件の虫  
 物もあつて。火焔と吐け。競ひ蒐る景物も雅人も。嗟やと叫び。そのま。其  
 処も平張も。回絶もあつて。吉見の行者も。と。大事と腰刀と抜んと。と。海  
 身疼て臂月の働も自在とあつて。遠の朽惜とあつて。焦燥足と揚て。蹴んとす。

忽地其の縮まりと動くとあつて。遠のゆめもあつて。ん。実も運命縮ま  
 王。故もあつて。ん。然のあつて。吾も苟くも。皇胤もあつて。獸もあつて。ん。かく。悩もあつて。ん。是  
 不敬せんといふ。怖もあつて。阿容も此処もあつて。死もあつて。後代もその恥辱もあつて。天  
 地祇もあつて。不。嗟悔もあつて。牙と肉もあつて。筋骨更もあつて。不。仕せぬ。如  
 何と。冷方もあつて。かの虫血物もあつて。害もあつて。不。害もあつて。左も右もあつて。い  
 て。手も下もあつて。行者も前後と取捨も火焔と吐出。大刀も。蛇棒も。と。振りと  
 微塵もあつて。ん。と。生めく。の。行者も悔もあつて。遍もあつて。流もあつて。行もあつて。雨もあつて。更もあつて。い  
 生も心地もあつて。吾もあつて。の。宿業もあつて。一日に時。女堵も。不。仕せぬ。終もあつて。い  
 女。生もあつて。責もあつて。遇もあつて。心も苦もあつて。ん。と。執らんとす。吁命もあつて。か。時  
 あつて。ん。と。良。款。息もあつて。及もあつて。の。件もあつて。虫血物も。心。地。も。怖もあつて。色もあつて。視もあつて。左  
 右も立。因もあつて。と。何。ぞ。と。ん。ま。げ。息もあつて。切もあつて。と。奔。来もあつて。並。松もあつて。行。者もあつて。ん。と。

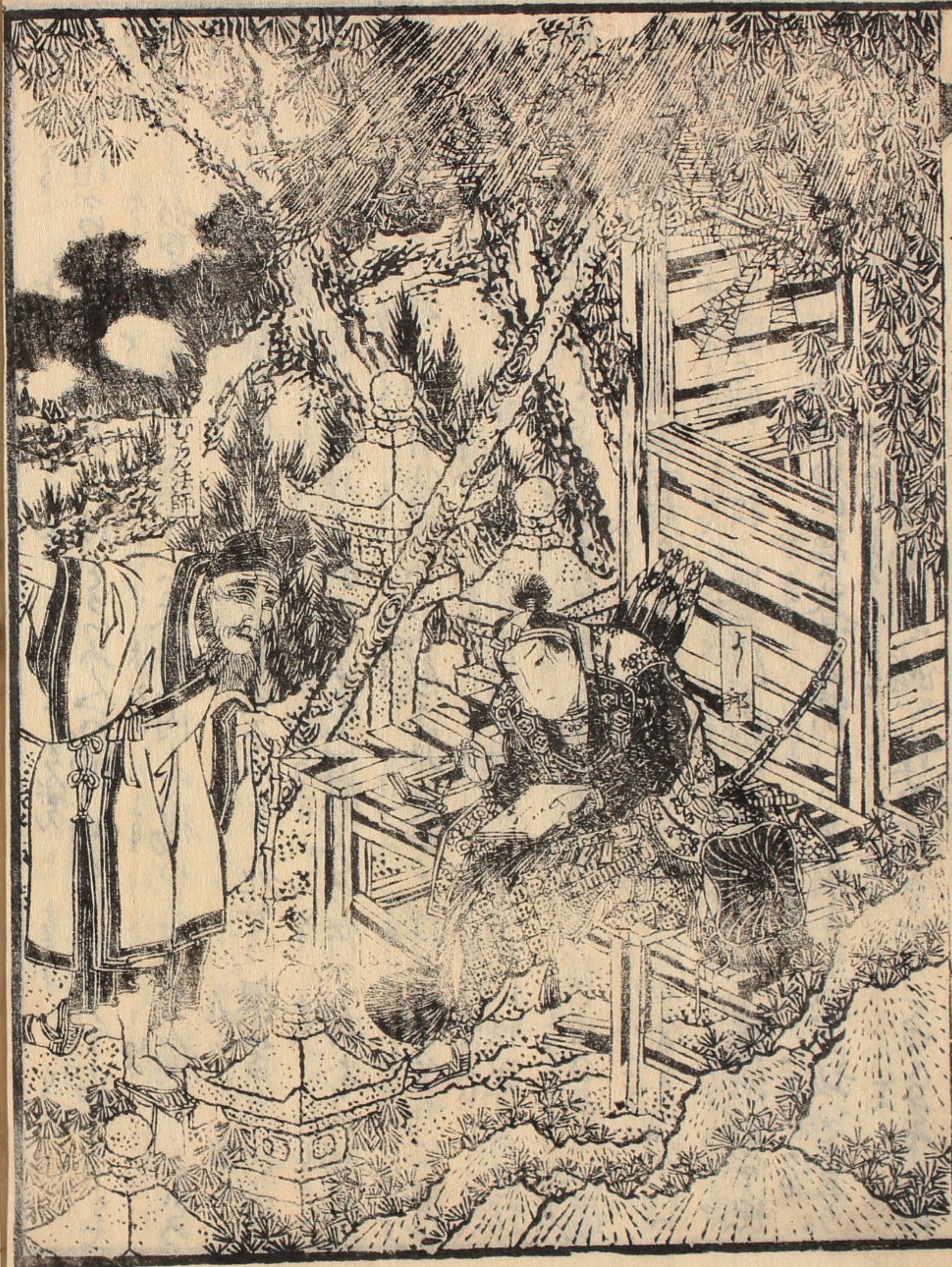


並松上。汝が仕方と尋ねんと凡雨不遭ひらふ宿り蟲物の難あゝ心す。か  
と扶け得るをよ。このひも果ぬ小並松の牙と喰み眼と怒ら。この大王と稱へる  
猓猴と目うげと跳り龍の勢ひ宛然飛をのめ。その内件の大王及び虎豹猿  
の蟲物等。周章狼狽社壇と眺まへ何方ともなく飛まるといふ並松の空小犬ひ  
声高く吼らじ。このまもを候仕方と失る人。不測ありけり。この時今まを疾る行  
者。渾身清くして素のや。兩風を吹小止。星の光り現はせり。行者の  
雑人們の候小休てえや。蟲物の退きり。まや農民們と。と救回呼法とをえ  
渾身冷果て。一言半句もあまるとは。俗に滅小死し。り。無転心うつとをせり。  
と良妻の歎息。然るも。一旦の縁を断て。阿婆をさ。その候死すまを  
あゝん生憎しや。茶のあゝ。さ。食まう。水とあゝ。わ。分抱。つ。  
さ。いふせん。と右祝左祝法。か。の並松の何方の岸。小遊。ど。著。さ。と。吾こ。小。在

と。い。ふ。何。と。を。知。り。し。る。を。ま。も。も。猜。疑。の。一。つ。あ。る。不。今。蟲。物。と。逐。退。け。夫。う。  
何。方。へ。候。つ。ん。倘。か。の。變。化。と。逐。龍。鬼。て。山。深。く。も。入。り。れ。と。声。と。張。あ。が。並。松。と  
と。救。回。呼。へ。と。ま。ま。を。候。法。義。邦。に。呆。ま。さ。あ。れ。ま。と。惘。然。と。復。む。つ。と  
か。す。折。り。樹。同。より。候。れ。候。ま。お。さ。人。あり。行者。の。ま。ま。を。蟲。物。と。候。捕。へ。と  
ら。ち。成。る。小。膝。け。ま。と。その。容。の。老。人。も。ま。一。條。の。杖。と。携。え。首。の。羽。巾。あ。せ。と。戴  
ひ。道。服。の。物。と。著。ま。履。を。ま。さ。と。知。名。と。下。廻。り。を。ま。と。ま。ま。を。足。と。早。め。と。行  
老。う。候。小。近。づ。き。傍。り。足。下。の。吉。見。つ。冠。老。あ。る。や。こ。ま。の。山。小。住。る。乾。坤。た。人。の。弟  
子。あ。と。夢。昇。と。踊。り。の。あ。る。吾。少。い。足。下。小。好。似。あり。然。れ。の。先。以。より。足。下。小。小  
凶。多。あ。る。ん。と。な。か。り。候。小。狗。と。と。その。凶。と。避。ま。ん。と。と。也。も。わ。た。の。山。の。當。縁。と  
あ。つ。く。小。遊。へ。す。然。ま。ま。と。も。その。半。の。挫。小。足。ぬ。へ。り。と。く。行者。難。小。迫。ら。の。吾。の。車  
其。井。へ。拓。き。り。と。流。ん。と。と。人の。當。下。の。老。足。と。申。す。行者。と。伴。る。ひ。未。は

願下。と縁て吾不託。今宵暴お吾不射ひ義邦既不危急不迫ね。  
 頓ちて救ひ来。その布の足立郡栗飯原の林中。山神の祠のち之。急  
 がす。と不昇と出て。不来り。つ。道人の教不差。足下。こ。在。ん。  
 後。ま。面辨と。冠者ある。疑ひ。かく。詞。掛。と。説  
 示せ。吉見の冠者の思ひ。吾の吉見の冠者。乾神を  
 人。如何。多。人。此。方。あ。つ。心。當。り。の。あ。け。ま。ど。好。身。あ。り。と。五。口。の。不  
 危急の災害。あ。つ。と。小。約。と。七。獲。ら。む。の。辱。あ。れ。心。操。小。約。と。い。わ  
 近。き。以。不。圖。来。り。て。吾。の。不。せ。ん。彼。の。ま。り。別。親。に。代。り。を。難。し。と。い。わ  
 は。不。今。日。如。此。と。も。一。に。性。方。と。失。ひ。つ。既。ふ。あ。る。ん。と。い。わ。不。射。ひ。と。い  
 顯。り。が。再。性。方。と。失。ひ。つ。並。松。の。と。い。わ。へ。ま。ま。彼。の。人。より。吾  
 心。の。獲。り。不。副。ら。む。右。不。も。左。不。も。さ。く。每。不。猜。疑。暗。る。と。い。わ。り。

既。不。和。僧。が。り。如。く。あ。る。其。乾。坤。と。い。ふ。人。の。神。仙。と。も。稱。す。べ。招。う。と。い  
 僥。倖。あ。る。は。西。を。て。教。と。票。人。去。来。案。内。と。錫。つ。と。い。わ。痛。ま。り。と。い  
 所。ま。で。吾。不。後。農。民。們。と。い。わ。絶。え。と。い。わ。死。せ。り。渠。等。の。不。射。ひ。  
 妻。子。あ。り。その。歎。き。と。想。像。加。減。の。亡。骸。と。い。わ。捨。あ。る。と。い  
 根。の。餌。食。と。い。わ。魂。の。宙。有。不。迷。ふ。と。い。わ。後。不。此。知。を。之。埋。め。り。和。福。助。子  
 願。と。い。わ。進。復。あ。る。幸。慶。と。い。わ。と。推。止。め。農。民。們。怪。異。と。い  
 倒。と。い。わ。雲。雨。同。絶。あ。る。と。い。わ。息。吐。と。い。わ。足。下。の。心。を。さ。す。還  
 正。道。と。い。わ。埋。葬。と。い。わ。後。悔。寡。と。い。わ。と。埋。め。り。埋。め。り。埋。め。り。  
 吉。見。の。冠。者。の。從。願。て。腰。の。掛。り。墨。汁。と。楸。と。葦。と。抜。出。し。懐。紙。へ。何。と。徳  
 め。細。の。端。不。結。び。と。い。わ。俵。か。の。夢。昇。不。傍。り。と。い。わ。樹。と。巡。り。坂。と。登。り。  
 不。射。ひ。と。い。わ。救。町。と。い。わ。ぬ。不。荊。棘。不。り。と。い。わ。路。と。埋。め。何。方。と。存。て。と。い  
 〇七



むらじ法師



義邦難を  
通して  
夢庵小  
會ふ

月夜八編卷之二

54

性多ク之来ありてなり。然るも夢其の先ありて居と確かなかの叢の  
 中よりと死も平地に走りて。尉老の後方より孰れ従て渠の年の耳以  
 と振る。乾坤道人の門に入りて。道術と得たりとも。初まてその健あること  
 ふ人間の所為とらるるえは。かかたてまのかの盪物も。吾と再び誑うこと計  
 較ありあつて。夫と信じて思慮多し。叢林の曳入して。苦むこと  
 智くやいせん。不知とやいせん。通して。嗣忠ありて。小あつて。道奴と捕へて  
 咽。その実不口も探るるの。吾単より力足らず。先小心の。勞する  
 こと安らね。頻り小疑惑の心を生ず。進むと二三歩ある。退くと二  
 歩。とよびて。道林と志。夢其の。後して。十段を。下。夢其の。願て  
 弱定むこと。遅と。棘。小理む。経路。小困。さう。然も。く。吾と。かの  
 盪物と疑ひ。故人。故る。人。厥。小。小。物の。奇。想。と。り。て。師。の。術。と。も。田。舎。也

其の赤心も。知りつゝ。ん。小。然。る。を。疑。ぐ。こと。らん。や。あ。よ。そ。く。う。を。私。疑。深。なる。大  
 ある。災害。あり。お。ま。ま。ま。争。う。遅。と。ま。ま。の。あ。る。と。と。呼。ま。れ。て。今。を。や。進  
 退。も。谷。ま。り。ぬ。吾。ま。二。個。の。壯。夫。あり。任意。天。磨。鬼。神。あり。何。れ。と。の。事  
 う。あ。う。ん。と。心。と。励。ま。う。あ。後。左。右。小。眼。と。死。り。て。か。の。経。路。と。劑。の。後。ひ。ひ。か。く  
 五。六。回。も。来。り。不。方。面。より。炬。火。と。照。と。喘。ぎ。く。来。り。の。年。ま。二。十。四。五。の。事  
 なる。面貌。柔。和。の。若。宿。あり。夢。其。身。と。ら。る。う。膝。ひ。て。を。向。ふ。君。の。所。の。命。ふ  
 ち。あ。ひ。ひ。と。い。ん。と。あ。る。手。庵。の。程。在。る。に。び。き。処。此。処。探。し。ま。ら。せ。し。か。く。と。ま  
 より。言。え。来。あ。き。炬。火。と。燃。し。を。中。と。ま。と。その。方。角。之。定。め。雅。く。呻。吟。歩。ゆ。ひ  
 しが。ま。る。恙。ある。た。言。辨。と。ん。な。り。と。安。堵。せ。り。と。額。着。り。夢。其。身。の。微。笑。今。小。花  
 め。ぬ。汝。が。好。ま。れ。く。こ。そ。然。い。あ。ま。汝。も。知。り。人。より。飛。と。翔。り。を。小。騰。は。道  
 術。と。之。得。て。る。ま。い。何。れ。茶。乳。を。と。あ。ん。ん。秘。の。廣。網。あ。あ。ず。う。と。回。を。て。依。て

その傍と先ふまひ歩みも。狩者ひとまのてと徳何と云異りさりのあ  
あはと珠ふ夢交昇が終るも以前の廣網あつたか。とらんとて多田  
前司。廣網あつたあらんぞらん。倘然もあつた願ふ稀る。奇遇なりと  
あひひ。半疑ひ解るるも足の進も抄りて後まのせと走るるも再ゆ  
まのるるも未ふけむ松栢いとの養りくる。その傍ふ些細る。技折戸ある夢  
昇の指。こまを吾も閑居せる草の庵ふゆ。去来汝共入る人と先ふま  
りるまの狩者も玄海柴の戸と推用とて程入る畢竟ことより何る  
あつたの巻を讀ゆんあつた

朝夷巡鳥記全傳第八編卷之二終

小正 忠之中村良基述  
傳愛與田賴閣正  
類語 小學作文教授書 全五冊

此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩惟リ作文ノニ語林ニ  
後ル。ヲ憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其俗耶スルヲ  
ニ試ミ其效アル俗文要語ヲ用テ問答令正誤文俗文復紙法等々各書ヲ  
初卷ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授方ヲ説キ日用短文一冊ヲ編ミ  
次卷ハ首ニ俗語ヲ編ミ揚ゲ次ニ四季贈答文祝賀慶弔文電信文  
用ノ類編文諸証文等ヲ編ミ第三卷首ニ作文要字ヲ編ミ和辭ヲ掲  
次ニ方今流行ノ雅文ニ俗語ヲ神々僅一二十枚録シ内外ヲ以テ一  
ヲ成ス至テ短キ未嘗有レ概而白キ八讀百餘章ヲ編ミ其四卷五  
兩卷ハ首ニ漢文要字ヲ編ミ虚詭解ニ用テ例書及古相狀ヲ示シ次ニ  
紀事論説贊銘題跋傳序祝文吊文祭文等々作例數百ヲ編ミ其文ノ種  
類ニ從テ其趣意ト作方ヲ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ且獨字ニ  
但ニ每卷ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ且獨字ニ  
テ便スリ書ナリ其親切ナルヲ知ルハ大阪北區寶寺町四丁目 前川源七郎敬白

